

活動報告

外交史料館新展示室の開室について

一 開室の経緯

二〇二四（令和六）年四月八日、外交史料館本館に隣接する麻布台ヒルズ森JPタワー五階に外交史料館新展示室（以下、新展示室）が開室した。一般公開前の四月五日には新展示室の開室式が執り行われ、関係者に対する内覧会が行われた。開室式を主催した上川陽子外務大臣は「新たな展示室が、皆様にいつでもお立ち寄りいただき、我が国の外交を、より身近に感じていただけるようなスポットになることを期待しています」と挨拶した。

外務省は一九七一（昭和四六）年に外交史料館を開設し、当初は同館内に展示スペースを設けていたが、一九八八（昭和六三）年七月五日に財団法人吉田茂記念事業財団（後に財団法人吉田茂国際基金）より外務省飯倉公館敷地内に建設した外交史料館「別館」の寄贈を受けたことで、その二階を新たな展示室（以下、旧展示室）としてこれまで一般に公開してきた。なお、この別館は、吉田茂記念事業財団が収集してきた吉田元総理関係資料を一般に公開する「吉田茂記念館」を飯倉公館敷地内に建設、寄贈したいとの申出に対して、外務省が外交史料館の別館として、各種外交史料を展示する施設であれば認めると

の条件の下に建設を許可したものだった。

旧展示室は開室以来、常設展示内容の充実を図ると共に、様々な特別展示・企画展示を実施してきた。しかし設備の老朽化が進んだことや、展示室がある別館二階への移動手段が階段のみに限られており、バリアフリー対策上の課題があるなどの問題が浮上していた。また、展示の内容面においても、（一）常設展示と企画展示を行うスペースの未分化、（二）展示解説の充実、（三）展示内容の刷新、が課題となっていた。加えて、飯倉公館敷地内に存在し、アクセスが難しいという点も見学者から指摘されていた。

他方、外交史料館の存在する麻布台地区では、虎ノ門・麻布台地区市街地再開発組合が一九九三（平成五）年の設立以来、長期間にわたって地区の再開発企画事業を進めていた。外務省は同組合の提案を受けて当該事業に協力する方針を決定し、その具体的方法を検討する中で、現在地への外交史料館展示室の移転が決定された。

麻布台ヒルズ森JPタワーは二〇二三（令和五）年十一月に開業したが、外交史料館新展示室の開室作業は開業後も進められ、上述のとおり翌年四月に開室した。なお本移転作業が具体化するに伴い、二〇二三年九月二九日に旧展示室は閉室した。

二 設備の概要

新展示室は、常設展示室(約一〇七平方メートル)と企画展示室(約三六平方メートル)で構成されている。約九八平方メートルの規模の旧展示室に対して面積比で約一・五倍の大きさとなった。



常設展示室

展示室内は所有者以外が国宝・重要文化財を公開する際に、文化庁

長官による許可が不要となる「公開承認施設」に準じた仕様で設計され、温度及び湿度を一定に保つ空調設備が設けられている。また、企画展示室内の展示ケースはその性質上原本史料の展示が可能なエアタイト構造のケースを設置している。他にフロア内には会議室、収蔵庫と備品保管庫等が設けられている。

三 常設展示室の特徴

旧展示室の常設展示は、個別の展示史料の短い説明のみが設置されていたため、外交活動の歴史的展開がわかりづらいという難点があった。その点を改善するため、新展示室の常設展示室は、主要な条約書等の史料を時代順に展示・紹介する従来の展示方式を踏襲しつつ、新たに各時代の重要テーマを項目名とする柱を展示ケースの隣に立て、ケース上部には、写真、地図等を多数用いて展示史料の歴史的背景を解説する説明パネルや映像解説を設置した(ケースの手前にもコラム的な情報を提供する個別パネルを設置し、理解を深める工夫としている)。映像解説は、戦前・戦後の特に重要な外交案件として、「条約改正」及び「サンフランシスコ講和」に関する展示説明パネルに設置している。また、常設展示の最初には「外交とは何か」というパネルを設置し、展示室見学を通して、外交活動の目的や役割を考えていただくきっかけとなることを企図した。

展示史料も、旧展示室における最新の史料が一九六五(昭和四〇)年署名の日韓基本関係条約に留まっていた状況を見直し、その後の時代、具体的には一九七二(昭和四七)年署名の沖繩返還協定や二〇一八(平成三〇)年署名の環太平洋パートナーシップに関する包括的及び先進的な協定(CPTPP)といった条約書等を追加した。さらに常設展示の最後にエピソードパネルを設置し、最新の外交上の取組をスライドで紹介するようにした。スライドの内容は随時更新が

可能で、これにより、新展示室開室後ある程度時間を経ても、古さを感じさせないようにした。

また常設展示室内には「シンボル展示」として、映写用プロジェクタ及びスクリーンを設置し、歴代の外務大臣や外交官らの残した外交にまつわる印象的な言葉を映写している。

展示史料は三九点（一点を除き全て複製）と、旧展示室から大きな増減のない点数であるが、幕末から今日に至るまでの我が国の外交の歩みを展望可能な構成となっており、広く外交の重要性を喚起することを意図している。

四 企画展示室の特徴

新展示室の企画展示室は、周年行事等の機会に関連する原本史料を企画展示の形式で展示することなどを想定した仕様となっている。上記展示を行う時期以外には、準常設展示的な性格の展示として、以下のような展示を行っている。

（一）吉田茂元内閣総理大臣関係資料

日本外交に大きな足跡を残し、また旧展示室ともゆかりの深い吉田茂元内閣総理大臣の関連史料と、その人となりを紹介する解説パネルを展示している。旧展示室時代にも展示していた、昭和天皇より下賜された鳩杖や池田勇元内閣総理大臣に贈った書その他、新たに旧蔵書等を展示している。



企画展示室

（二）条約締結プロセス
外交活動の中でも重要な役割を持つ条約等の国際約束の締結過程について、明治時代に結ばれた日布渡航条約の関連史料を展示しつつ、特に重要な条約の場合の締結手続を解説パネルで紹介している。

（三）日本国旅券の歩み
外務省の発行する公文書の中で一般に最もよく知られている旅券（パスポート）について、

一八六六（慶應二）年に初めて発行された旅券から、現代の旅券までを展示している。

（四）杉原千畝と「命のヴィザ」

一九四〇（昭和一五）年に、カウナス領事館副領事としてユダヤ系難民に「命のヴィザ」と呼ばれる査証（ヴィザ）を発給し、国内外に広く尊敬を集めている杉原千畝について、その足跡を紹介する史料と、二〇〇〇（平成一二）年に作成された顕彰プレートを展示している。

企画展示室では最初の企画として、二〇二四年七月二日から八月三日まで、特別展示「日英通商航海条約―陸奥宗光と条約改正―」を開催した。これは一八九四（明治二七）年に調印された同条約の調印一三〇周年を記念する展示として開催したものである（本誌関連記事参照）。

五 開室後の状況と展望

麻布台ヒルズという好立地に開室したこと、平日に加えて土曜日の開室を開始したことにより、四月以降、見学者数は旧展示室と比較して大幅な増加を見せている。九月には見学者数が開室以来一万人を達成することとなった。アンケート結果によれば見学者の年齢層も旧展示室時代より多様化しており、我が国の外交の歩みを国民の皆様知って頂く上で、喜ばしい状況と考えられる。

開室後の新たな取組として、教育機関との協力の拡大も進められている。旧展示室時代より実施してきた「こども霞が関見学デー」などの児童向け取組に加え、国内広報室の協力を得て開始されたのが「小中高生の外交史料館訪問」である。見学では新展示室併設の会議室を活用した外務省及び外交史料館についてのミニ講座やクイズラリーを盛り込み、二〇二四年一二月までに通算九校・一三一名に来館いただいている。

また、新展示室における企画展示等の取組も進められている。先述の「日英通商航海条約―陸奥宗光と条約改正―」に加え、二〇二四年一二月から翌年一月まで、在京ギリシャ大使館との共催で、日・ギリシャ外交関係樹立一二五周年を記念した企画展示「外交文書に見る日本・ギリシャ関係」を実施した。周年等の機会を活用した企画展示は新展示室への再度の来訪を促す意味でも重要であり、今後も取組を予定している。

新展示室の開室までには、歴史資料の展示施設の空間設計、展示手法、内容構成、設備、文化財の安全な展示といった諸点について、検討段階で様々な方々のご協力をいただいた。特に波多野澄雄委員長以下『日本外交文書』編纂委員会の各委員、虎ノ門・麻布台地区市街地再開発組合、森ビル株式会社、株式会社日本設計、株式会社丹靑社、日本銀行金融研究所貨幣博物館、東京都公文書館、文化庁、国立文化財機構文化財活用センターといった各組織、外務省各部署に様々なご意見、ご協力とご対応をいただいた。ここに記載することができなかった多くの皆様にも多大なご協力並びにご支援を賜った。篤く御礼を申し上げます。

（文責 浜岡）